

# 守護神 ゴーレス

第9話 中編  
『国際通り改造計画』  
WE BILLED THIS CITY

作：みかつきなお

挿絵：ぜんざいナオミ

## 第9話 国際通り改修計画

We bill'd this city 中編

感染

山形屋跡地で33号と35号の調子をみていた辰巳は同じ頃、一つの結論に達した。

各機の関節アクチュエーター制御自立CPUの言語がおかしい。呼び出した文字が次々と\*\*\*\*\*という表示に変換されている。

「ウイルスだ。自立CPUはネットに繋がっていない。どうやつてウイルスを入れたんだ！」

携帯が鳴った。裕一からだ。

△辰巳さん問題は起きてないか！△

「こちらヒューストン。問題が発生した！ 早くこっち来い！ お前の出番だ！」

辰巳はニライ建設プロジェクト運営本部に繋いだ。

「この計画を今すぐ中止してください。ウイルスが発生しています。」

「技術担当部長だ。御忠告ありがとうございます。今動いている機体が10時休憩に入ったらすぐメンテナンスに移ろう。」

「すぐですよ！ どんな誤動作を起こすかわからなですよ。」

「そんなこと言つても、今動作中の機体の状態を君は把握しているか？」

防護壁を支えている機体を電源オフにしたらどうなる？ 防護壁と一緒に倒れてしまうだろ。アクチュエーターが動作状態を停止することはいつせいに死ぬのと同じなのだよ。落ち着いて現状のメンテナンスを続けなさい。」

「わかりました。」

辰巳は正論を言われて黙った。

国際通りの取り壊し予定区域のすべて、100台のバッファロー、ハンドマン、ヘラサギが順調に動いている区域では設置された防護壁の内側で次々と建物が解体されていった。ハンドマンが支え、バッファローが壊し、ヘラサギが裁断して破片をダンプに乗せる。これらの解体作業は旧来の重機の数十倍の作業量といえよう。次々とダンプの車列が辰巳の前を通過してゆく。もうすぐ10時半で休憩か。ここで全体の調子が判明できれば。

バッファロー天空1号

那覇タワーの拘束を終えたゴーレスは機体を展望台部分の安定作業に移行した。

今回の解体用にチューンナップされたバッファロー、ニライ建設チーフパイロットの安慶名の愛器『天空1号』が展望台の下部、いわゆる『くびれ』部分に取り付いた。

バッファローは前面の二本のフォークが角っぽいところからのネーミングだろう。前面には作業状況に応じたオプションを取り付けられる。今の作業は水圧カッターでくびれを切り取る仕様になつてい

る。二本の軽量鉄骨をくびれにはさみこみ、ハンドマン2機が鉄骨をまわし、中間にあるバッファローが回転するとともにコンクリートの円柱であるくびれをカットする。

カットされ次第、鉄骨を支える2機と本体をささえるゴーレスで下に降ろされる計画だ。

「安慶名さんよ、今日の闘牛は最強的やさや！」

「だからよー。久手堅さんはどつちに掛けるね！」

「私はあれだね。大穴で那覇タワーの勝ちだね。真栄平さんは？」  
「あんた達よー、安慶名さんの本物の牛は5連勝中

やし、絶対まきらんしが（負けないだろうね）。「やつぱり本物の闘牛の天空号もこのバッファロー

天空1号もどつちもちゅーばー（強者）やさ。」宙吊りになつたアクチュエーター機から聞こえる作業員たちのたわいのない会話は終わらなかつた。1

10時休憩はあと10分で終わる。

#### マイクロアクチュエーター

「分類としては悪質なクラッキングじゃない。握力がなくなるだけで停止はしない。だが駆除してもまたウイルスが派生する。もしかすると不正なハードを誰かに取り付けられたかもしれない。」辰巳は駆けつけた裕一にデータを見せた。

「急いで調べてみます。」

裕一は早速ハンドマンの大きな右手に手をかざしながら集中した。解析力を持つ裕一ならではの仕事だ。

さつきの点のような反応がイメージの中で広がってゆく。やはりここからか。

レンチでカバーを取り外すと指の関節部に1・5cmくらいの芋虫型マシンがカサカサと動いていたのを拾い上げた。

「犯人はこれですね。」

「何？ これ。ここまで精巧なマイクロアクチュエーター初めてだな、こいつを解析してこれのワクチノンを小雪と作る。裕一は本部に掛け合って中止させてくれ。」

「わかった！」

暴走

いよいよメインイベントか。国際通り上空500mまで降下した大型飛行客船は那覇タワーの作業を見る客が窓に集まっていた。兼光はこの瞬間を感慨深く迎えた。自分の手で那覇の風景を変えるその瞬間を作りだしたことを。

バッファローは水圧カッターを表面に密着させ、高水圧で那覇タワーの首をカットしはじめた。技術部長さん。この精巧なマイクロアクチュエータを見てよ、まずいよ。何が起こるかわからないよ。」第一勧業銀行ビル跡地にある運営本部のプレハブに裕一は駆け込んで『虫』を見せた。

「うーん。これが原因としてもなし。よし、今前各詰め所で機体をチェックしてもらおう。そこでこの虫がでてこなかつたら動作確認後作業再開、30分置きに動作確認をする。あまり事を大きくせずに冷静にいきましょう。」

「わかった。俺も虫を搜してきます。」

「え？ いま休憩時間を延長しているのはウイルスを発生させているマイクロアクチュエーターがあるからだつて？」

兼光は運営本部からの唐突な連絡に動搖した。

「見つけた！ 16号機から虫発見。」

「銀通り詰め所で裕一は新たな虫を発見してゆくが、那覇タワーが作業中なのに気がついた。」

「なんで止めないんですか本部長。」「あの部署は桐丸重工兼光社長が現場総責任者です。」

「繋いでくれよ兼光に。八幡アクチュエーター、ゴーレムの社長だといっててくれ！」

辰巳と小雪は問題の『虫』からデータを読み取り、ワクチノンソフトを製作しようとしていたが、ワクチノンを作つてもすぐプログラムを変えて進化し、ワクチノンの進化とのいたちごっこになる事がはつき

りしてきた。

「自立CPU 자체의被害は微々たるものだが、全体の効率を悪くする。ワクチンで劇的によくなるわけではないんだな。」

「なら逆に体に耐性をつけさせればいいんじやない。」

「一応研修医。脳神経AR科だな。そこから導きだされるのは。」

「漢方薬的対処法、滋養強壮剤。本体の強化プログラムね。99%を製作したのち兼光に必要なコアエグゼクティブファイルデータをもらう。」

「これで行こう。」

バッファロー天空1号は順調に半分ほど展望台下部を切断していた。空中を軽量鉄骨とともに回転しながら作業するバッファローはある意味優雅で、向かいのてんぶすビルではテレビ中継カメラがその雄姿をとらえていた。

飛行船の事務室に移動した兼光は窓辺で裕一のライブフォンを受けた。

詰め所のモニターに兼光の顔が映る。

「どうも兼光です、ゴーレスの八幡社長。」

「ウイルスの攻撃ですよ。とにかく早く止めてくれよ。あと、コアなんとかエグゼクティブをくれ！ 強化プログラム作成中だ。」

「とりあえずですね。うちで把握している動作データでは不具合は発生していない。現状は大変な問題

だが、タワーのカットが終わらないうちに止めると飛行船で吊り下げという不安定な状態で待機を続けることになる。カットして展望台を下に降ろすまで中断はできないんだ。」

「それはわかるけど、一分間停止して確認してくれよ。」

「でももうすぐカット終了だよ。」

バッファローは展望台下部を90%カットした。パイロット安慶名はカッターを停止、最後の仕上げに『角』を加熱状態にセット、角突き一撃でカットを終了させようとしていた。

「安里さん、準備完了。カウントお願い。」

「安慶名さん了解。5、4、3、2：1 go！」

作業員全員で声を合わせたカウントダウンの後、バッファローの電熱で赤くなった角が一突きをいれた。

ひびが割れて全周カットは成功した。

大型飛行船やギャラリーから拍手が上がった。飛行船が展望台部分をゆっくり上昇させた。

しかしバッファローの突きは止まらなかった。展望台の下部に無用な傷がどんどんついてゆく。「止まれ！ 天空1号！ 次の仕事は終わつたんだ。」

## ハッキング

安慶名の声むなしく、バッファロー天空1号は自動的に突きを繰り返す。

みずきは異常に気がついた。唚然とするバッファロー担当保安員に変わつて呼びかけた。

「安慶名さん！ 脳波オペをカット、工作オペを接続カットして。」

「どつくにやつてる。なんでoffにならん。何とか配線の接続を変えるさ。」

激しい突きで展望台が激しく揺れた。これではワイヤーがもたない様子を確認した安里が全員のモニターに出た。

「第一ハンガーは展望台を先に降ろして。第二ハンガーは沖映通り側に並行移動。ハンドマン2機先に下ろして。天空1号は調子を見てから降ろす。」

4つのクレーンをとりつけた飛行船、第二ハンガリーはゴーレスとハンドマンと天空1号を引き離した。舜は斜め下からバッファローを見上げた。

「第2ハンガーより、安里さんへ。降ろさないとケーブルもたない。」

「しかし、今降ろすとしたらまずいでしょ。」

「僕が通信に割り込んだ。舜が通信に割り込んだ。」

「僕が空中で天空1号を押さえます。ゆれを押さえ

て落下の危険を減らします。」

「あの戦いを私は見たよ。君ならできる。お願ひするよ。」

ワイヤーが巻かれ、次第に空中で暴れるバッファロー天空1号が近づいてきた。

「安里さんありがとう。みずき、俺からの死角をガードしてくれ。」

画面上のみずきは誘導棒を振つて『了解』の合図を出した。

「よーし、ゴーレスいくぜ！ フルパワー！ ダイブイン！ ……？ ダイブイン……。」

画面に小雪が現れた。

「まずいわね。現在のゴーレスの起動状況はフルパワーの30%よ。ゴーレスの蒸気エンジンをフルパワーにするためには動かずに10分、動きながらだとその状況で変わります。」

「なんですがフルにできんわけ？」

「力が強すぎるのよ。細かい作業の力の加減があなた苦手でしょ。今回は想定外よ。ワクチンソフ트を今製作中、あとから援軍を送るから。健闘を祈る。」ブチツ

「切るなよ、しようがないなあ。やるだけやるしかない。」

目の前に前部多目的マニピュレーターが牛の顔に見えるバッファローが迫つてきた。

みずきが第二ハンガーのクレーンの動きを指示してゴーレスが天空1号の脇から押さえられる向きに移動させた。

いいよだ。揺れる天空1号の胴体にしがみついた。背中から引き出したワイヤーを巻きつけた。ワイヤーの片方の端をハンドマンの真栄平に投げた。

「わかった。わったーハンドマンがちゅーじく（強く）ひっぱるさー。」

国際通りのビルから見学していた人々はこぞつて下に降り、避難を開始した。

鵜飼たちはてんぶすビルから降りて、現場に近づいて様子をみていた。

「あれはナポレオンを拘束した時と同じワイヤーで固定箇所を増やす作戦か。でも空中はまずいぞ。」

船越が携帯を取りました。

「鵜飼さん、比嘉さんから応援たのむつてさ、向かいましょう。」

「俺達の出番だ！ 船越いくぞ！」

二人は警備員の制止を聞かずに防護壁の内側に入り、走り出していった。

「船越気が利くな。これでいこう。」

マニュアル操作

舜は3本目のワイヤーを激しい前後動を続ける角

「兼光さん、強化プログラムが完成する。これを使ってハンドマンをまた動けるようになるんだ。コアエグゼプティブのプログラムを公開してくれ。」

裕一の交渉に応じた兼光はプログラムを公開、辰巳たちはプログラムを完成させて33号と35号に試験インストールした。

「自立系を完全オフにして動かせだと！！！」

駆けつけた鵜飼と船越は辰巳の要求に鵜飼はすごんで見せて、次にはやりとした。

「いいじやねえか、やつてやろうじやねえの！」

ハンドマン33号と35号は二人の運転テクニックで立ち上がった。

自立系をカットする。基本的にバイロットが気を抜いて運転していてもアクチュエーターが勝手にバランスをとつて楽に運転できるのだ。自立系がないと、バイロットはかなり神経を使う運転だ。オート

マ車からマニュアル車に変える以上の技術が必要になるのであるが、完全非コンピューティングであった70年代のアクチュエーターマシンを思えば自立系を切ることは極端な要求ではない。

「鵜飼さん、他のブースに回つてけん引ワイヤー集めて来ましょう。」

「船越気が利くな。これでいこう。」

に取り付けようとした。すると後ろ足が激しく振られ、ワイヤーのゆれでゴーレスははじかれた。

「搖れが大変だ裕一、どうする！」

「舜、水中の姿勢制御と同じだ。高压蒸気バランサーを使え！」

裕一の声を聞いて、蒸気バランサーでゆれを制御した。

「第2ハンガーよりゴーレスへ。これ以上振動に耐えられない。バッファロー天空1号を降下させる。」

降下させたバッファローは地上を二本の足と前輪によつてワイヤーの遊びの分だけぐるぐるとむづみ橋交差点を旋回していた。

上空の第2ハンガーはバッファローの動きにあわせてぐるぐると回っていた。回転する操縦席のなかで第2ハンガーから必死の声が届いた。

「ゴーレスのワイヤーを切る。限界が来る前にバッファローを押さえてくれ！」

地上に降りたゴーレス。みずきは第1ハンガーから降ろされたゴンドラから状況を見守った。  
みずきは天空1号の意思のようなものを意識した。

「苦しいと言っている。早く取ってほしい。舜、お願い。」

